

おぢばで喜びを頂こう

それぞれが帰れる日に、帰れる形でおぢば帰りを



4月18日、教祖誕生祭 昇殿参拝に向かう各教会の代表者たち

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

ぢば。一つ始め出しという。それから道から所々から運ぶ処から、一つ理が治まる。

明治22年3月31日

今から140年前の明治14年5月14日、私たち真明芦津の初代たちは講を結成しようとおぢばに帰り、教祖から「真明組」との講名を拝戴しました。その喜びと感激は、いかばかりでしたでしょうか。さらに、かんだいの石出しという尊い御用を頂戴し、ひのきしんに勇み立ちました。

その後も先人たちは、ある時はたすけを願いに、ある時はたすけていただいたお礼を申し上げるために、ある時はひたすら教祖にお会いしたいとの思いで、何度もおぢばに足を運びました。そして教祖から親しくお声をかけていただいた喜びや感激を胸に地元へ戻り、さらにおたすけに励みました。

これまで講名拝戴記念の年には、一堂に会する形で記念おぢば帰りを実施してきましたが、現在は多くの人々が一度に集まるのが難しい状況です。

しかし、それぞれが帰れる日に、帰れる形でおぢばへと足を運ぶことはできるでしょう。先人たちがおぢばに足を運び、教祖にお会いした喜びや感激を、今を生きる私たちも味わわせていただきたい。そして教祖にお喜びいただける成人を、おぢばでお誓い申し上げます。

正面方加

「古き道があるから新しい道がある。古き道はをや、新しい道は子というさあ／＼だん／＼に新しい道を通ろうとするで、古き道が忘れる。よう聞き分け。古き道があるで新しい道という。」

古い道が元であり、親である。親があるからこそ、子がある。最初の苦労の道があるから、今日の新しい道もある。先輩の道、初代の道、親の通った道、更にその元である、教祖50年のひながたの道こそ根本である。この元を忘れては、新しい道も成り立つものではない、と仰せくださる。先人や親々は、神様から頂戴している御恩、親々から頂戴している御恩に、感謝・報恩の心で生涯お通りくださった。だからこそ今、私たちは何ん自由なく結構に生きている。真明組講名拝戴140周年の本年、親神様、教祖、親々から頂いている御恩に感謝する心を強くもって、御恩報じの道をしっかりと歩ませていただきます。

《4月月次祭 挨拶》

教祖ならという思案を 判断の基準に

大教会長 井筒梅夫

皆様方には日頃からそれぞれのお立場の上で、時旬の御用の上にお運びくださいます、誠にありがとうございます。コロナ禍が第4波に入り、特に近畿地方の感染者が急激に増えている状況です。そうした中、一日も早い終息を念じつつ、人々のたすかりと世の治まりを共々にお願ひさせていただいて、併せて教祖の223回目の御誕生日を^{ことほ}寿ぎ申し上げ、只今大教会4月の月次祭を^{つが}恙なく勤めさせていただきましたことは、本当に有り難い次第です。月次祭にあたり、思いますところを少し申し上げてご挨拶とさせていただきます。

今月29日には「全教一斉ひのきしんデー」が実施されます。昔からひのきしんは天理教の看板と言われるほど、日常の信仰生活に密接して存在するものです。毎日コツコツとひのきしんをしておられる教会やようぼくがたくさんおられます。単独布教に出た布教師が、毎日駅の清掃ひのきしんに明け暮れていたところ、それがきっかけとなって道が付き始めて教会の設立に^{つな}繋がったのだと、その上級教会の会長さんから聞いたことがあります。

東京オリンピックが近づいてきましたが、先のオリンピック

柔道の金メダリストの大野将平選手が、大会を万全の体調で迎えるための陰の徳積みにと、毎日ゴミや捨てられているペットボトルを拾い、道場の清掃など、人の見ていないところでひのきしんを実行していたのはよく知られた話です。また、『天理時報』の4月11日号に、バトンタワーリングでこれまでに世界の頂点に9度立っている25歳の青年ようぼくが、日頃から心掛けてゴミ拾いをしているという記事が掲載されました。このように、日頃からひのきしんに励むようぼくの真実を親神様は大きくお受け取りくださるのだと思います。

ひのきしんとは、親神様から絶え間なく頂戴する御守護への感謝と喜びを態度に示す御恩報じの実践です。また、日々の寄進として、毎日の暮らしの中で実践することです。つまり、親神様の御守護に毎日お礼を申し上げ、感謝することを忘れてはなりません。その機会が朝夕のおつとめであろうと思います。朝夕に神様に手を合わせることで、朝に日頃賜る^{たまわ}尽きせぬ御守護に心からお礼を申し上げ、恙なき一日をお願い申し上げます。夕にその日一日に頂戴した御守護の数々に思いを致して厚くお礼を申し上げる。この御守護へのお礼と感謝の心が日々の御恩報じに現れてくるのです。

ひのきしんデーは年に一日のことですが、これは単なる行事ではなく、全教のようぼくが改めて親神様の御守護に目を向けて、報恩感謝の心で御恩報じのひのきしんを実践させていただく日であります。

今年は支部によって会場を設けると、昨年と同様に自宅や教会の周辺で個々でする所がありますから、各々確認され

た上でひのきしんに励ませていただきしたいと思います。
毎日の暮らしの中にひのきしんがあることが普通になるように、お互いに日々を感謝と報恩の心で通らせていただきたいと思います。

教祖にお喜びいただきたい

この18日、教祖には223回目の御誕生日をお迎え遊ばされます。当日は芦津に繋がる道の子一同、おぢばにおいて、教会や自宅において、心からお祝いを申し上げたいと思います。

明治20年陰暦正月26日までは、当時の先人方にとって教祖は大変身近な存在でした。お屋敷へ帰れば教祖に直接お会いすることができ、お言葉も頂けました。教祖の親心も肌身をもって感じておられたと思います。この「教祖に何が何でもお喜びいただきたい」というのが当時の信仰者の信条でありました。梅



治郎初代をはじめ、眞明組の当時の先輩方は、教祖にお喜びいただきたい一心で、貿易の中心であった大阪に集まってくる各地の名物や名産品、珍しい物をお屋敷へよく運ばれたと聞きます。初めておぢばへ帰った人が、当時の大和は何もない一寒村であるのに、お屋敷にはさまざまなものが集まっていることに驚いたという話が伝わっています。

私たちの先輩は教祖にお喜びいただくことが、そのまま我が喜びでした。今は教祖のお姿を拝することは叶いません。しかし、お姿は見えねども、教祖は御存命のままお屋敷においでくださるのです。扉を開いて世界中の人々に、温かく大きな親心をお掛けくださり、陽気ぐらしへと導いてくださっています。この道の信仰は教祖さえ見失わなければ道に迷うことはありませんし、確かな道へお導きいただけるのです。私たち人間が陽気ぐらしへ辿り着けるように、羅針盤の如くお残しくださったのがひながたの道であります。

教祖ならどのように通られるだろうか。どうすれば教祖はお喜びくださり、お受け取りくださるだろうか。この「教祖なら」という思案を判断の基準に置くことが、ひながたの道を辿る上で大切な手立てとなると思います。後に続く私たちのために、あの厳しいひながたの道中をあえてお通りくださった教祖の親心は、決して忘れてはならないと思います。初代様や眞明組の先人方のように、教祖にお喜びいただくことが、そのまま自分の喜びになれるような信仰者に、私はなりたいと思います。教祖にご安心いただき、教祖にお喜びいただけるように、お互いに教祖がお付けくださったすけ一条の道をしっかりと踏みしめて、持ち場、立場の役割や御用を勇んで果たし、御恩報じの実践に精いっぱい働かせていただきたいと存じます。

教祖御誕生の慶びの月の祭典にあたって、教祖にお受け取りいただく成人の足取りをお互いに誓い合い、今月の挨拶とさせていただきます。

今日の月次祭、大変ありがとうございました。

(要約)

《4月月次祭 神殿講話》

心のほこりを払い ちば一条につくす句

役員 奥田正徳

心一つにお願いづとめを

光陰矢の如しの言葉通り、本年も早や3カ月半が過ぎ、明後日は、御存命の教祖には223回目の御誕生日をお迎え遊ばされる教祖御誕生祭を目前にしております。昨年より続いております新型コロナウイルス感染症の勢いは、第3波、第4波となり、未だその終息を見ることなく、朝に夕に一喜一憂する中に、更に追い打ちを掛けるかのよう「変異株」といった、一層感染力の強い型のものが現れて、日夜私たちを脅かしております。

今やワクチンの予防接種に望みを託し、あらゆる知恵を絞ってその拡大を最小限に留めるべく、官民

挙げて努力の真っ最中です。

その影響は、道のお互いにとりましても同様に、御用の上で支障を来し、月次祭をはじめ個々のおたすけ活動も制約され、さらには各行事におきましては軒並み中止となりました。

そうした中、本年は眞明組講名拝戴140周年の記念すべき時を迎えるにあたり、芦津に繋がる私たち一人ひとりにとりましては、まさに大節であり、成人をお急き込みくださいますゆえの親心と受け止めて、親の思召おほしめしにしっかりお応えさせていただく心を定め直し、感謝と報恩の心をもって、節から新しい芽を出させていただかなければならないと思います。

本年は両統領の改選の年でありますが、再任の旨ご発表があり、新年度のスタートを切ることになりました。

早速4月1日正午より、大亮様を芯に、コロナウイルス感染症の早期終息を願うてのお願いづとめが勤められ、私たちおぢばに勤める者は家族揃って参拝をさせていただきますました。

お願いづとめに先立ち、宮森内統領先生は、「『人をたすける心は真の誠』と、教祖のひながたの道を、今自分のできることを思案し、その実行を心定めて、一手一つに心を揃えて、コロナウイルス感染症の早期終息と共に、身上平癒を願うて勤めさせていただきたい」と述べられて、本年12月まで、毎月1日正午よりお願いづとめを勤める旨、ご発表くださいました。また大教会におきまして、4月1日正午に合わせをお願いづとめを勤めました。皆様方におかれまして、どうぞ親の心に合わせをお願いづとめ

をお勤めくださいますよう、お願い申し上げます。日々のおつとめ、月々の祭典時にお願いさせていたたくのは申すまでもありませんが、毎月1日にも、都合の良い時間でも結構ですから、お願いづとめをお勤めいただきたいと存じます。教会へ参拝できる方は教会で、また自宅から出られない方はご自宅にてお勤めくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

教えに沿った通り方

さて、この度の大節をどのように受け取ればいいのか思案するとき、全人類に対しての親神様からのメッセージであることは間違いのないところですが、私たちお道のお互いは、どのように受け止めなければならないのか、思案を重ねなければなりません。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』の31「天の定規」に、

教祖は、ある日飯降伊蔵に、「伊蔵さん、山から木を一本切つて来て、真っ直ぐな柱を作っ



「みて下され。」

と、仰せになった。伊蔵は、早速、山から一本の木を切つて来て、真っ直ぐな柱を一本作つた。すると、教祖は、

「伊蔵さん、一度定規にあててみて下され。」

と、仰せられ、更に続いて、

「隙がありませんか。」

と、仰せられた。伊蔵が定規にあててみると、果たして隙がある。そこで、「少し隙がございます。」とお答えると、教祖は、

「その通り、世界の人が皆、真

っ直ぐやと思うている事でも、天の定規にあてたら、皆、狂いがありますのやで。」

と、お教え下された。

とございます。

果たして、私自身、世界たすけのようぼくとしての自覚の上に立つて、日々の行いの中に教えに沿った通り方をしているのか、素直に親の心に沿い切った日々を歩んでいるのか、と我が身に問いかけるとき、甚だ申し訳ない次第です。

また教祖は、

「やさしい心になりなされや。

人を救けなされや。癖、性分を

取りなされや。」

同123「人がめどか」

とお話くだされました。

道の初代をはじめ先人たちは、教祖の仰せられるままに、その心にお応えされ、たすけていただいた喜びを報恩感謝の心いっぱいに、勇み心に変えて、我が身、我が家を顧みることなく、おたすけに邁進されました。その結果、講を結び、今日の道へと発展し、今のお

互いがあるのです。

往還道となった今、教えの道を通る私たちは、ややもすれば親々の徳のお陰を頂く中に、自分では間違いない、正しいとの思いで歩んではいけないか。自分では正しいと思つていても、天の定規にあててみれば隙間があることを自覚して、常に反省することを心がけなければなりません。これこそ、コロナ禍の今だからできることだと思います。

おふでさきに
見る親心

おふでさきに、

せかいにハこれとゆうているけれど
月日さんねんしらす事なり

十四号 22

かみなりもちしんをふかせ水つきも
これわ月日のぎねんりいふく

八号 58

とあります。

平成に入ってから近年を振り返つてみましても、平成7年1月の阪神淡路大震災や平成12年の北海道有珠山の噴火、平成23年の東

日本大震災、それによる津波、原発事故など、この30年の間に、地震、噴火、台風、豪雨、豪雪などの自然災害や、それに伴う事故が毎年のように起こっています。

それに加えて、お道のお互いにとりましては、平成29年のかんろだいの事情に続いて、翌30年には、われわれの親の御身上という大節をお見せいただいております。

おふでさきに見る親神様の「残念」「立腹」は那邊にあるのか。おふでさきの用語別索引を元に見ますと「残念」という言葉が95首出てまいります。そのうちの「一号32」と「七号58」には、同じお歌に2度出てまいりますので、正味93首となります。

また「立腹」という言葉は18首に見られますが、その内7首は「ぎねんりいふく」というように、残念と立腹を重ねて使われていますので、正味11首となり、合計104首に「残念」「立腹」のお言葉が使われています。

おふでさき1千711首の内の約6

パーセントであります。104首にわたり「神の残念、立腹」月日残念、立腹」とのお言葉を拝読するとき、そのお言葉の前後のお歌を通して、一れつの陽気ぐらしの上から世界たすけをお急き込みくささり、厳しい中にも道を外すことなく歩ませてやりたいとの親心を感じさせていただくのです。

例えば先ほどの、

かみなりもぢしんをふかせ水つきも

これわ月日のぢねんりいふく

というお歌のすぐ後には、

この事をいま、でたれもしらんから

このたび月日さきあしらする

八号 59

月日にハみな一れつハわが子なり

かはい、ばいをもていれとも

同 60

一れつハみなめへくのむねのうち

ほこりい、ばいつもりあるから

同 61

このほこりすきやかそふちせん事に

月日いかほどもふたるとて

同 62

とのお歌が続きます。

心のほこりがあるゆえに、親の仰せに沿えない子供の心を十分承知の上で「ほこりの払い方」すなわち、おつとめを真剣に勤めることによって、払いにくいほこりを払ってやろうと、真実の親なればこそのお言葉と拝察するのです。

こうした一連のお歌から、私たち人間を思う親心を感じずにはいられません。同時に、自分の成人の歩みの鈍さや未熟さ、心の至らなさを申し訳なく思う次第です。

大木の根の生涯

「成人とは日々年々親の思いに近づく歩み」と聞かせていただきました。そして「理の御用を通してこそ果たされる」ともお教えたいただきます。

眞明組の初代講元・井筒梅治郎先生をはじめ先人たちは、おつとめに命を懸けてお通りくださいます。病人の枕元でおつとめを勤めた。朝3座昼3座夜3座と日に命を継いでのおつとめに、自分の寿命を縮めてまでも人のたすかりを

願う真実の様は、正に命懸けのおたすけと申せましょう。

また、ぢば一条、教祖一条につくし運ばれ、無い命をたすけていただいた喜びは、何でもどうでも親にお喜びいただきたいと、

「大阪へ大木の根を下ろして下されるのや。」

『逸話篇』71「あの雨の中を」とのお言葉のままに、大木の根に相応しい根の働きに生涯を捧げられました。

今日のお互いがあるのは、「たすけられたら、今度は困っている人々にをいをかけ、結構なおたすけを頂かせるのが、何よりの神様への御恩報じである」とのお仕込みを素直に実行された、初代をはじめ先人たちがたすけていただいた喜びを勇み心に変え、大木の根を目指してお通りくださった賜物であると、感謝せずにはおれないのです。

『眞明芦津の道』巻一に、

……井筒梅治郎先生の生涯は、自分は土の中にあつて、幹を張

らせ、花を咲かせ、実をみのらせる大木の根となる「根の生涯」ともいうべきものであった……

33頁

と記されています。

根の働きとは、本来土の中にあつて、決して表に現れることなく、草木を育てる。即ち、幹を太らせ、枝葉を茂らせ、また花や実を実らせるために必要な水分や栄養を蓄え、供給することであり、地中深く八方に根を広げて根張りをきかし、木本体をしつかり支えるものであります。

そうした根が表に現れてしまえばどうなるか。木そのものが枯れてしまうことになるでしょう。

大木の根の生涯とは、常に縁の下力となり、たすけ一条の御用に伏せ込まれた姿と言えるであります。

現在159カ所の大教会があります。が、その約4分の1は眞明組の流れの中より生まれたことを思い出すとき、正に大木の根に相応しい姿と言えましょう。

根に力をつけよう

さて、講名を戴いて140年経った今の状況を思えば、大木の根が些か弱ってきている状態ではないでしょうか。今回、枯れた枝葉や折れた枝を切り取り養生するに至ったことは断腸の思いに値いたします。

今ここで性根^{しょうね}を据えて、しっかりと根に力をつけることが、私たちの使命であると思案いたします

とき、根に力がないのは、根に栄養が足りないのは、すなわち親へのつくし・運びが足りない姿と受け止めます。ぢば一条、教祖一条につくし運ばれた眞明組の初代の道に立ち返ってこそ、講名拝戴140周年の旬の動きであると確信する次第です。

コロナ禍なればこそ、先人たちの心を思い起こして、この大節を眞明組のど根性をもって、本年の目標である「感謝と報恩」で乗り切ろうではありませんか。

過日、新聞の「朝の詩」欄に、

「つくし」と題した次のような詩が載っていました。

つくし

つくし、つくし

つくし、つくし、つくし

春だ！

土手に生え出た土筆を見て、待ちに待った春が来たことを喜び一杯に表現したのでしょいか。

私はこの詩を「おつくし」と改題し、

おつくし

おつくし、おつくし

おつくし、おつくし、おつくし

今だ！

として、今こそおつくしに励む旬であると思案いたします。

講名拝戴記念の秋季大祭まで余すところ半年となりました。10月の大祭が講名拝戴140周年を記念すべき日になります上から、ぢばへの心定めを完遂させていただくとを固くお誓い申し上げます、本日の神殿講話とさせていただきます。

(要旨)

統合により御本部にお目標様をお戻しした教会

※(一)内は統合先の教会

東津部属	東吹田分教会(吹田)
吉野川部属	大明龍分教会(大関門)
	神麻分教会(三好)
	脇大分教会(脇町)
島原部属	半田川分教会(吉野川)
	芦分教会(島原)
	島幸分教会(島原)
	島崎分教会(島原)
日方部属	日眞津分教会(日方)
日高部属	日原分教会(日高)
	日塩分教会(日高)
始良部属	千穂田分教会(始良)
	山川分教会(始良)
門司部属	田野浦分教会(門司)
	宮江分教会(門司)
大島部属	東方分教会(大島)
	芦恵分教会(大島)
沖繩部属	沖渡分教会(沖繩)
尼崎部属	神國分教会(尼崎)
四ツ山部属	南山麓分教会(四ツ山)
大冠部属	天野川分教会(大冠)
芦華部属	両出側分教会(芦華)
和鎮部属	鎮水分教会(和鎮)

立教184年4月27日

立教百八十四年 四月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教荳津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、世界一れつの陽気ぐらしを楽しみに、この世人間をお創め下され、教祖をやしるにこの世の表にお現れになり、世界たすけの道をお啓き下さいました。以来、長の年月親心溢るるお導きのまに／＼、成人の道をお連れ通り下さいます御高恩の程は、誠に有難く勿体無い極みでございます。私共は、親神様の尽きせぬ御守護と、御存命で御働き下さる教祖のお導きを頂いて、日々御恩報じの道を歩ませて頂いておりますが、その中にもこの月の十八日は、教祖が尊き魂のいんねんを以てこの世にお生まれ遊ばされてから二百二十三回目の御誕生日をお迎え下さる芽出度き日柄でございますので、お許しを頂きました今日の吉日に、役目に与る者一同、教祖の御誕生日を寿ぎ申し上げ、慶び心を一つに座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、四月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には今日を楽しみに、参らせて頂きました荳津の道の子達が、慶祝の思いを一杯におうたを唱和し、日頃賜る御恵みへの感謝に併せて、一層の成人をお誓い申し上げる状を嬉しく御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願ひ申し上げます。

更には身上了すけ、事情治めの上には、各々の真実心をお受け取り下さいまして、何卒不思議たすけの理を賜りますよう、重ねて御願ひ申し上げます。

私共をはじめ、荳津に繋がる教会長、ようぼくは、四月の月次祭を迎えて、教祖がお通り下されたひながたの道を確かと心に治めて、いかなる道中も明るく勇んで通らせて頂き、教祖の道具衆として、たすけ一条の一手一つの歩みを進めさせて頂く所存でございます。

何卒、一同の道に尽くす誠真実をお受け取り下さいまして、変わらぬお導きのまに／＼、成人の道をお連れ通り下され、教会長、ようぼくの世界たすけに向かうところには、遍くたすけの理をお垂れ下さいますよう御守護の程を、一同と共に慎んで御願ひ申し上げます。

四月月次祭 祭典役割

四月月次祭 祭典役割														
祭主			扨者		扨者		座りづとめ		てをどり		地 方			
大教会長			守田清一		加世田洋		大教会長 井筒文夫 今川政治 会長夫人 前会長夫人 井筒ちぐさ		瀧本眞二郎 川畑澄博 山田道弘		奥田眞治 石川道夫 竹内義忠 井筒敏成 守田清一 山本義範			
指図方			賛者		賛者		前 半		山埜こずえ 梶川りよ子 吉田幸子 木村真次 蓑内浩 岩切正教		石川健郎 梶川和隆 岩切正義 中村俊和 立花善文 浜田宣郎			
湯川正罔			浜田宣郎		村田光伸		後 半		湯川照代 中村寿々代 山田秀子 湯川正信 新居里実 樋川泰士		瀧本庄司 吉田裕樹 花岡忠和 今川聖一 梶川芳男 西本興正			
在 籍 者 一 同											伝 供		瀧本眞二郎 献饌長	

喜びの奉告祭

梶川和人会長
かじかわかずと

和鎮分教会

4月11日、和鎮分教会（大阪市中央区）は大教会長夫妻臨席のもと、梶川和人四代会長就任奉告祭を執り行った。参拝者は60名。

和鎮の道は、昭和23年、御教えに深く感銘を受けた梶川治三郎が入信したことに始まる。以来治三郎は、ちば一条、をや一条に徹し、にをいがけ・おたすけに奔走した。昭和30年、和鎮分教会初代会長に就任。その熱意は歴代会長、ようばく、信者に受け継がれ、地域に根差した教会として現在に至る。

午前11時、梶川会長の祭文奏上の後、大教会長が挨拶。「ちばと息一つに心を合わせ、陽気ぐらしの手本となる教会を目指してほしい」と新会長に対して期待を述べられた。さらに梶川和隆前会長に、28年間の会長の務めに対し、労いの言葉をかけられた。
おつとめの後、梶川会長が挨拶。



「和鎮に繋がるようばく、信者と一手一つに、ちば一条、をや一条の心で御恩報じの道を歩ませていただきます」と決意を述べた。

その後は弁当を配布し、参拝場では前会長夫妻への感謝の意を込めた映像が上映され、参拝者は懐かしみながら見入っていた。

また、感染防止対策を徹底し、参拝場での密を避けるため、外会場にモニターを設置して、共に参拝できるようにした。

グループワークやおつとめ指導の研修

育成部

育成部（山田道弘部長）は、4月17日、大教会で「道の後継者の集いⅡスタッフ研修会」を実施。密を避けるために2回に分けたところ、今回は17名が参加した。

この秋開催予定の「芦津道の後継者の集いⅡ」は、日常生活や教会活動に役立つこと、人を喜ばせ笑顔にできるような知識、技術を自ら選択して身につけることが主眼となっている。今回の研修会は、班付スタッフを務める若手籍者や、選択講座で講師役を務める者が、受講者を指導する際のポイントなどを学ぶものである。

最初に山田道弘育成部長が挨拶。「われわれスタッフがしっかりとスキルを高め、参加してくださる方に喜んでいただく」と述べた。午前中は、グループワークの進め方についての研修。当日実施するグループワークを実際に行い、参加者の意見をしっかりと聴くことや、司会の進め方などを学んだ。



地方の発声練習。背筋を伸ばして、いい姿勢で

午後からは、選択講座の説明と実習を行った。今回は特に、おつとめの地方の発声方法などを、望月文さん（門司分教会後継者夫人）を講師に詳しく学んだ。さらに鳴物の音やテンポの合わせ方など、おつとめや鳴物を指導する際の注意点などを学んだ。

お知らせ

「立教184年

こどもおちばがえり」

「学生生徒修養会・高校の部」
いずれも中止が決定しました。

教務部報

任命・恒例祭日変更願
日名南分教会（紀周部属）

六代会長 瀧本 晶子

昭和20年8月30日生



〔教歴〕

女子美術短期大学卒業

昭和41年3月30日

おさづけの理拝戴

昭和41年2月21日

修養科第296期修了

昭和41年2月28日

教会長資格検定講習会修了

昭和42年9月15日

教会長資格検定合格

昭和42年9月16日

教人登録

昭和42年10月5日

教会長資格登録

平成24年7月1日

〔恒例祭日変更〕

春季大祭 1月8日

秋季大祭 10月8日

月次祭 毎月8日

就任奉告祭 5月9日

右、立教184年4月26日、お許し戴く。

教会所属変更

日名南分教会

旧所屬 日高分教会

新所屬 紀周分教会

立教184年4月26日

大棚分教会

旧所屬 東方分教会

新所屬 大島分教会

立教184年4月27日

修養科教養掛《12〜3月》

教養掛主任

井筒 文夫

教養掛

荻内 浩・瀧本一太郎

奥田 正儀・吉田 誠

木村 真次・石崎 真人

岡島きよの・井筒ちぐさ

教人登録

岩切 大成（四ツ山）

立教184年3月19日

おさづけの理拝戴《3月》

西本 真平（尼崎）

谷上 由樹（眞一）

中村 勇治（芦浪）

菊池 理一（和嶺）

《拝戴順 4名》

初席《3月》

《2名》南向

《1名》直轄・畦川

《順序運びより 4名》

計 報

徳修分教会三代会長（鞆部属）

井内 弘氏（いちひろむ）



令和3年4月25日出直された。93歳。

告別式は4月27日、久米義彦・明高分教会長斎主のもと、徳島市の葬祭場で執行された。

氏は、昭和2年8月25日、

父・井内喜一、母・キヌエの

長男として徳島県名西郡に生

まれた。20年徳島県立商業高

校卒業、26年おさづけの理拝

戴、55年修養科第468期修了、

教会長資格検定合格、教人登

録、12月26日徳修分教会三代

会長に就任。

教区では徳島南支部長を務

め、上級・明高分教会では役

員として真実を伏せ込んだ。

長年銀行で勤務していたこ

ともあり、どんな御用も正確

につとめ、周囲からの信頼も

厚かった。また優しく温厚な

性格で、大勢のようばく、信

者から慕われた。

月例統計（自令和3年1月1日〜至令和3年3月31日）

項 目	初	の	修	教
名 称	席	お	養	人
() 内教会数		理	科	
大 教 会	9	1		
(1)				
東 津	4	2	2	
(13)				
吉 野 川				
(32)				
島 原				
(20)				
日 方	2			
(16)				
日 稗	1			
(8)				
本 津				
(2)				
始 良				
(5)				
津 和				
(13)				
門 司				
(8)				
當 別				
(6)				
大 島	3	1	2	
(29)				
沖 縄				
(4)				
尼 崎		2		
(3)				
四 ツ 山				1
(6)				
大 冠				
(3)				
島 下				
(1)				
大 保	1			
(3)				
青 山				
(1)				
芦 浪		1		
(1)				
甲 邊				
(1)				
芦 華				
(2)				
芦 津				
(1)				
天 入				
(1)				
豊 野				
(1)				
紀 周	2			
(2)				
勝 明				
(1)				
神 の 島				
(1)				
兵 庫 眞 洲	1			
(1)				
芦 ノ 郷				
(2)				
本 明 勇				
(2)				
明 道				
(1)				
芦 東				
(1)				
和 鎮		1		
(4)				
神 滝				
(1)				
芦 明 徳				
(1)				
眞 彰 化				
(2)				
本 氣				
(2)				
芦 明 照				
(1)				
眞 伯				
(1)				
合 計 (236)	23	8	4	1